潟語り（三十七）

文・小西一三
絵・小西由紀子

戦前の八竜橋のこと

前回は八竜橋の近くに住み、橋の番人をして「橋場の家（はしばのえ）」と呼ばれていた真崎家の真崎敬一郎さんに橋の話を伺いましたが、今回は自性院の近くで生まれ育った柏崎キミ子さん(85)に八竜橋の架け替え当時のことについて話をお聞きしました。

戦時中は金属の欄干を供出して、欄干がねぐなってしまった

私の実家は天王91番地。前回（36回目）、話っこをしていた「橋場の家」と呼ばれてた真崎さんの家の近く、石川という家だ。ちょうどお寺の前で、今の杉渕鉄工所さんの隣りだ。お寺は子どもたちの遊び場のようなもので、よく境内で遊んだもんだよ。お寺には今でも錫杖持ってるお地蔵さんと八大龍王の石碑があるすべ。私のばあさんは「お寺の前を通る時は、必ず地蔵さんと八大龍王の前で手を合わて拝め。そうせば風邪もひかねで丈夫になる」と言うもんだった。言うことを守って、ずっと手を合わせてきたがら、お陰さんで今でもこうして丈夫でいられるんだべな。

架け替え前の橋のことは、小さい時のことだどもなんぼが覚えている。船越側はしっかりした木の橋だったども、天王側の岸の方は土を盛ってその上に木の板を渡した土橋だったと思うな。橋を新しくする工事は確か昭和7、8年頃だった。工事は船越の方から始まり、船越の方ができてから天王側の工事がはじまった。近くに飯場ができて、工事の人たちがいっぺ泊まっていた。工事中は橋が渡られねぐなるもんだもの、渡し船が出て人を乗せて行ったり来たりしていた。渡し船の人は優しぐてな、乗る人が少ね時は私ら子どもたちを乗せてくれた。もちろん子どもは船越に用事などねえ。遊びで乗せてもらったんだ。

できた橋は昔のと比べれば大して立派な橋だったども、戦争が始まった頃、なんと橋の欄干がねぐなってしまった。欄干は鉄でできてたもんだがら、お国に供出したのよな。それで欄干のねえ橋になってしまった。でも。欄干のねえ橋は危険だというので、しばらくしてから代わりに木の欄干が付けられた。お寺でも鐘だとが、かなりの量の金属を供出していたもんだったな、お国のために。そういう時代だったもの。